
俺と自称関西人

津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と自称関西人

【Zコード】

Z0704Z

【作者名】

津凪

【あらすじ】

連載中の「僕と彼氏と兄一人」の妄想サイドストーリー。
酒を飲んでも酔わない浩美は酔っ払っている友一へキスを迫り
。

ありえない妄想BLです。本編とは全く関係ないです。

(前書き)

連載中の「僕と彼氏と兄」一人の妄想サイドストーリー。浩美と友一のBLな関係。微妙にえっちいので注意。

「めんなさい、主役よりも脇役大好きなんです。

「あ、だめ……ボク、もう……」

ぱたつと氣を失うキオ。愛斗はそんな彼に毛布をかけてやる。

「キオって、酔うとすぐ寝ちゃうよね」

と、笑う。

俺はビールを飲み干してから答える。

「弱いんだよな、キオは」

「まだ全然残つてんけどなあ」

と、虚ろな目で友一も言う。

愛斗はテーブルの上を簡単に片づけると、欠伸をした。

「あれ、僕も眠いかも……」

そしてぱたりとキオの隣へ倒れ込む。彼もまたアルコールに弱い。

「お？ 何や、愛斗も眠ったんか」

このメンバーの中で唯一酒に酔わないのは俺だけだった。

「友一、お前も寝たらどうだ？」

「ああ？ 僕はまだいけるわ！」

完全に酔っ払いである。

「静かにしろ。もう夜中の一時だぞ」

「知らん」

と、また缶に口を付ける。

四人で酒を飲むのは三回目だった。キオが眠ると後を追うように愛斗も眠る。友一は飲み過ぎて吐いたり、二日酔いになる。それがいつものことだった。

「あんまり飲むと、また吐くぞ」

「知らん」

友一はそう言つて缶の中身を飲み干した。度数が低いので大丈夫だとは思うが、さすがに今夜は飲み過ぎだ。

「……なあ、友一」

「ん？」

「キスしていい？」

真顔で俺が尋ねると、自称関西人は目を丸くした。

「は？」

「だから、キス」

顎を取れば、友一の酔いが醒めていく。

「ひ、浩美、何言つてんだし」

動搖しているのか、口調は東京弁に戻っている。

「嫌か？」

「あ、当たり前だろ！」

逃げ出そうとする友一を床へ押し倒す。

「静かにしろよ。一人が起きちゃうだろ」

と、俺はすーすーと寝息を立てる可愛い奴らを見る。

「な、ちょ……」

逃げ場を失つた友一が口を閉じたまま顔を背ける。

「悪いんだけどさ、入つて外見じやないとと思うんだ」

「い、意味分からん」

「キオも愛斗も可愛いんだけど、やっぱお前の方が何倍も良いなって思うんだ」

「……」

「つつーか、お前のその、普通なところが愛おしい」

「ふ、普通つて言うな！」

自称関西人は普通の人間だ。生まれは大阪らしいが一歳になる前に東京へ越してきて、以来ずっと東京で育ってきた。両親は純粹な東京人だが、彼はそれを何故か嫌っている。
「褒めてるんだから良いだろ？」

「ど、どこがだよつ」

いつもと同じ反応を見せる自称関西人。

「だから、俺はお前が良いんだよ」

覚悟を決めたのか、俺の顔をじっと見つめてくる。そつと顔を近

づけていくと、友一の身体が抵抗を始めた。

「どっちなの？」

ギリギリのところでそう尋ねると、友一の目が潤んでいた。

「こわい……」

「何が？ 僕が？」

首を横に振つて、言つ。

「ひ、浩美と、そーいう関係になるの、が

どうやら、彼はまだそういうことに不慣れなようだ。そういうえ
ば、まともに付き合つた彼女も数人だと聞いたな。

「心配するな、隠し通せばいいだけだ」

と、俺は今度こそ彼の唇に口づけた。両目を閉じた友一は愛らし
くて、俺もまた目を閉じて感じる。

唇を離すと、友一は言つた。

「……う、上手いな、お前

照れているのか、顔が赤い。

俺はにっこり笑うと、友一の頬を軽く撫でた。

「もう一回、するか？」

「……んなこと、思つてるはず

素直じやない彼の唇を塞いで、先ほどよりも濃いキスをする。

全身を強張らせていた友一は、やがて俺へ身体を預けるように緊

張を解いた。

「ん……あ、やめ

キオの寝言で目が覚めた。

いつの間にやら眠つてしまつていたらしい。すぐ近くでは友一が
俺の腕を枕にして眠つていた。

「……ああ、そうか

結局、友一はキス以上のことは許してくれなかつた。だから一緒に
眠ろうと言つたのだが、友一に腕を貸した覚えはない。

見ると、彼は幼い寝顔を無防備にさらしていた。安心しきつた顔

である。

「友一」

名前を呼んでも田を覚まない。

眠りに落ちる前に一人で交わした答え合わせは、意外とあっさりしていた。

友一は、普通と違う俺と友達以上の関係になれるはずなんかない、と思い込んでいたのだ。そんなこと知らなかつた俺は、とりあえず愛の言葉を囁いた。

一応、それ以上の関係になつたわけだが、この関係はいつまで隠し通せるだろう?

ふと浮かんだ疑問を、俺はすぐにかき消した。
どうにしても、今が幸せならそれで良いのだ。

(後書き)

本編とは全く関係ありません。
完全なる作者の妄想の産物です。
ちなみにキオは単体萌えです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0704n/>

俺と自称関西人

2010年10月9日01時06分発行